

## 学問としての民俗学, 学科としての民俗学

—— 現代中国民俗学の葛藤 ——

王 京\*

西 村 真志葉\*\*

21世紀の中国民俗学を読み解く糸口となるキーワードが二つある。一つは日本語の無形遺産あるいは無形文化遺産にあたる「非物質文化遺産」(以下、「非遺」と略)で、もう一つがフッサールの後期思想を代表する「生活世界」である。両者は単に中国人民俗学者の間でホットなトピックというわけではない。それは誕生以来政治と学問の狭間で揺れ続ける中国民俗学が、自らの存続をかけて歩む二つの異なる道筋であり、そこには「学科」と「学問」という中国民俗学の二重の自己像が映し出されている。

### 1. 「非遺」という名の熱狂の中で

2001年、昆曲がユネスコの無形文化遺産代表リストに登録されたというニュースに、中国国内は大いに湧いた。だがこのとき中央政府が登録申請業務を委託したのは中国芸術研究院であり、後に無形文化遺産の専門研究機関「中国非遺保護センター」が最初に設立されたのも、同研究院だった。つまり、中国国内で無形文化遺産が最初に脚光を浴びたとき、その中心にいたのは民俗学ではなく、中国芸術研究院であり、芸術学だったのである。これは事実上中国初となる無形文化保護法が『伝統工芸美術保護条例』という伝統芸術を対象とするものであったことや<sup>1)</sup>民間芸術とよばれる分野で芸術学が民俗学よりはるかに多くの業績を積みあげていたこと、そして当時業務の委託権を持つ文化部の視野に民俗学が入っていなかったことなどが関係している。

中国民俗学が無形文化遺産の名のもとに存在感を増すのは、2002年以降のことである。2002年5月、昆曲の無形文化遺産リスト登録1周年を記念する座談会が中国芸術研究院で開

---

\* オウ キョウ 中国・北京大学外国語学院 日本語学部副教授

\*\* にしむら ましば インディペンデント・フォークロリスト

催され、民俗学界からも劉錫誠や劉魁立らが「著名な専門家」として招かれた。同年12月の「非遺」国際シンポジウムには、これらのメンバーに烏丙安や郝蘇民、董曉萍らが加わり、その後も同様の座談会やシンポジウムに参加する民俗学者は年を追って増えていった。

上記2002年5月の会議では、全国範囲の調査や『中国少数民族芸術遺産集成』の編纂などを内容とする「中国非遺の認証・緊急保護・保護・研究プロジェクト」の始動が宣言された。実はこの3ヵ月前に中国民間文芸家協会（以下、「民協」）は「中国民間文化遺産緊急保護プロジェクト」を提起し、全国範囲での調査と資料集の編纂、「中国民間文化遺産リスト」の作成、「中国民俗資料庫」と「中国民俗」サイトの建設などの計画を発表している。

後者のプロジェクト名にもなっている「民間文化遺産」という概念は、無形文化遺産の中から、特に民俗学が長年調査と研究に努めてきた対象を抽出するものであった。思い起こせば、第25回ユネスコ総会で採択された「伝統文化及び民間伝承の保護に関する勧告」の「伝統文化及び民間伝承」は中国語で「民間創作」と訳され、これは中国民俗学が設立以来関心を寄せてきた研究対象そのものであった。だが、1998年の「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」以降、ユネスコが同じ対象を無形遺産あるいは無形文化遺産と呼び始めると、その訳語である「非遺」が昆曲のリスト登録をきっかけに大いに流布するようになり、当初この対象が放っていた強烈な民俗学カラーは弱められていった。こうした中で提唱された「民間文化遺産」という概念には、多くの学問分野が関わる無形文化遺産保護活動において、民俗学が担う役割の重要性を改めてアピールする目的があった。

「民協」と中国民俗学会は、いずれも鍾敬文がその創設に大きく関わった団体である。中国民俗学会設立以前は多くの民俗学者が「民協」の会員として活動しており、学会設立後も両学会の会員を兼任する者は少なくない。両者は「中国民間文学三つの集成」（『中国民間文学集成』、『中国歌謡集成』、『中国諺語集成』の総称、以下「三つの集成」）の編纂を共同で手がけるなど、ある種の協力体制を結んでいる。「中国民間文化遺産緊急保護プロジェクト」も、発起人及び実行委員長は「民協」会長の馮驥才だが、副委員長には劉魁立と烏丙安、委員には劉錫誠や邢莉、劉守華、劉鉄梁、朝戈金、董曉萍、賀学君、陶立璠、呂微など、中国民俗学の錚々たるメンバーが名を連ねている。実際には民俗学がその中心を担っていたのであり、同じ枠組みは後の非遺保護業務においても受け継がれた。例えば2006年に中央政府が「国家非遺保護業務専門家委員会」を設立した際にも、委員長に馮驥才、副委員長には劉魁立と烏丙安が就任している。委員の顔ぶれも同プロジェクトの実行委員と大差なく、さらに高丙中のような若い世代の民俗学者も委員に加わり始め、この傾向は年を追って顕著になってゆく。

2004年8月、全国人民代表大会でユネスコの無形文化遺産条約が承認されると、民俗学の動きは一気に活発化する。例えば中央政府は高級官僚教育の一環として、2002年から「閣僚クラス幹部歴史文化講座」を開いているが、2004年以降民俗学界からも烏丙安、劉魁立らが

講師として招かれた。また専門的な研究機構として、2003年に西北民族大学社会人類学・民俗学学院が主体となる「西北民族民間文化遺産保護研究センター」が設立され、その翌年にはすでに「中山大学非遺研究センター」と改名されていた「中山大学民俗研究センター」とともに人文社会科学重点研究拠点に認定され、科研費の面で大きく厚遇されることとなった<sup>2)</sup>。

中国初となる「国指定非遺代表作リスト」を作成するために、ほぼ全国の民俗学者が駆り出され、現地調査や書類作成、審査などに奔走した。リスト作成の際準拠したのは「国指定非遺代表作申請評定暫定実施方法」である。これは2005年に「わが国の非遺保護業務に関する國務院弁公室の意見書」に添付された公的文書で、その作成には劉魁立を筆頭に、高丙中や劉宗迪、巴莫曲布嫫といった中堅民俗学者が一年前から加わっていた。当時の中国民俗学会秘書長の高丙中が2004年の学会活動を総括する際に述べたように、中国民俗学は「国の非遺保護業務にあらゆる方面で尽力した」のである〔高2005 中国民俗学会：Online〕。

2006年以降、中国民俗学の一連の努力が次々と実を結んでいく。まずこの年に公布された「第1回国指定非遺代表作リスト」には、中国民俗学が長年研究を積み重ねてきた「孟姜女伝説」や「花兒」などの口承文学や芸術はもちろん、清明節や端午節、七夕、中秋節などの年中行事が軒並み登録された。この年中行事について、2004年以降中国民俗学会は中央政府の委託を受ける形で、文字どおり学会をあげて調査・研究に取り組んできた。現行の法定休日が伝統的行事との関連性を欠いているという学会の指摘は、2007年に『『全国年中行事及び記念日休暇法』の修正に関する國務院の決定』が公布され、翌年から清明節、端午節、中秋節が法的休日に指定される<sup>3)</sup>という形で結果を残すことになる。またこの動きと合わせて、山東大学民俗学研究所が文化部と共同で「中国年中行事研究拠点」を設立、雑誌『節日研究』を刊行した。さらには国家社会科学基金の特別委託プロジェクトとして『中国節日誌』の編纂も計画され、劉鉄梁や葉濤、岳永逸、張士閃、林継富といった民俗学者がメンバーに名を連ねた。そして中央政府が急いでいた「非遺」関連の法整備についても、その草案がまだ『中華人民共和國民族民間伝統文化保護法』と呼ばれていた頃から民俗学者は関与しており、これは2011年に『中華人民共和國非遺保護法』として初めて国家レベルの法律として公布されることになる<sup>4)</sup>。

中国民間文化遺産緊急保護プロジェクトも、展覧会の開催や各種出版物の刊行、「中国民間文化の傑出した伝承者」の認定などの活動が展開された。そのうち『中国結叢書』や『中国民間文化遺産緊急保護プロジェクト調査ハンドブック』、『中国口承及び非遺ガイド叢書』、県単位の『中国民俗誌』、『中国民間故事全集』などの出版はいずれも国の重要出版計画に採択され、刊行後は国レベルの図書賞を始め、数々の賞を受賞した。また1984年から継続してきた「三つの集成」の編纂事業も、2009年ついに全90巻の出版が終了した。

2008年8月に開催された「国家非遺保護業務専門家委員会」の会議において、「非遺」保護運動で活躍する中国民俗学会と「民協」は、「わが国の非遺保護業務を代表する権威的機関」

として、中国芸術研究院の「中国非遺保護センター」と肩を並べて、国がユネスコに推薦する無形文化遺産 NGO に選出された。同時に推薦された専門家4名のうち、実に3名までが民俗学者である。高丙中、朝戈金、巴莫曲布嫫が選出された理由として、長年保護行政に携わってきた業績以外にも、「英語かフランス語に堪能」で「国際交流の経験に富んでいる」という点が挙げられた<sup>5)</sup>。これは実質上、国内と同様、ユネスコへの無形文化遺産登録申請業務も、民俗学が担うという意味でもあった。事実、中国民俗学会は2012年にユネスコの諮問機関に認定され、無形文化遺産保護に関する政府間委員会に意見できる立場を獲得している。さらに、海外関連学会との交流も進み、アメリカ民俗学会と共催する「非遺」シンポジウムも、2013年5月には4回目を数えた。2013年は中国民俗学創立30周年の年でもあり、まさにこれ以上ない節目を迎えたと言えよう。

無形文化遺産保護をめぐる中央政府との連携、経費面での優遇、世論からの注目、そして国際的な場での活躍は、これまであまり脚光を浴びなかった中国民俗学にある種の達成感をもたらした。中国民俗学が長年見つけてきた民衆の文化が価値付けされただけでなく、民俗学自身の知名度や社会的地位も飛躍的に向上したのである。だが一方で、「非遺」という分野に大きくエネルギーを注いだ中国民俗学に眉を顰め、抗議の声をあげたのもまた民俗学者だった。

## 2. 「民俗学」を巡る思惑

批判の多くは、まず非遺保護制度そのものに向けられた。

例えば保護制度の中心となる申請／評価システムにおいては、上級政府が決定を下し、下級政府が文化を代弁し、専門家や研究者がその判断を補助する構造となっている。文化とその実際の担い手はただ客<sup>オブジェクト</sup>体として認定や評価の対象とされ、申請の準備段階から一切の発言権を奪われる。担い手が抱く思惑や利益は、政府のそれと相容れない場合には黙殺されるのである。

また、いわゆる評価制度は、本来生活と相互的に関連する諸事象を生活から切り離し、外部の基準で等級を設けることで、異なる文化間の、あるいは異なるコミュニティ間の不平等な現実を創り出してしまふ。これは明らかにユネスコの文化の多様性と平等性の原則に背くものである。

さらに、法的に認定するという形式は、普遍性を有する文化を固定化し、その所有権を公的に特定の民族や地域に与えると理解されかねない。そもそも文化は変化することで新しい環境に適応し、伝播や伝承という生命力を獲得するものなのに、オーセンティックな保護をその基本方針に据える制度は、文化の自足的な伝承や発展の可能性を抑制するだけでなく、文化の生命そのものをも奪いかねない。

以上のような批判は、日本人民俗学者にとって真新しいものではないだろう。中国において

も、これは基本的に1990年代後半から熱心に議論されてきた他者や間主観性、オーセンティシティなどの問題を踏まえた批判である。そうした議論の成果を無視するかのように、政府主導の保護運動に迎合し、飲み込まれてゆく中国民俗学を案じ、憤りを感じる中国人民俗学者がいるのも当然といえよう。

中国社会科学院の安徳明は、近年の研究成果を無視して保護運動に身を投じる民俗学者を「新しい官僚政治の共謀者」と切り捨てる。一時的に世界システムの主流イデオロギーに迎合することによって中国民俗学の発展を図っているだけだ、という弁解に対しても、今やどの国でも無形文化遺産保護のシステムは学問の領域を超えており、民俗学者は学問の見地からその進展に影響を与えることはできず、結局自分の利益と官僚政治のそれが重なる部分を探し出すことになりかねない、と厳しく批判している [安 2008]。

もっと辛口なのは、同じく中国社会科学院に所属する施愛東である。施は、猿知恵の働く学者と地方官僚なら、「いかなる民俗事象も、非遺のレッテルを貼りさえできれば『文化』という合法的な地位を獲得し、すぐに『保護』され、更には関連プロジェクトを立ち上げて経費を申請できる」ことに思いつくと指摘し、学者や商人、地方官僚、文化の担い手たちが国の予算を自分の利益に変えるために一時的な利益共同体を形成している現状を、「非遺」を舞台にした茶番劇に例え、中でもやたらに「非遺」を民族精神のシンボルへと祭り上げ、ナショナリズムな台詞を駆使して伝統文化の守護者を気取る学者が特に演技が稚拙だと皮肉っている [施 2009b]。

施は劉魁立の愛弟子だが、この分野で権威となった師をも視野に入れて、多くの民俗学者が「非遺」ブームの中で雑務に追われ、短絡的な対策ばかり論じ、本業である研究を疎かにしていると批判する。一貫して学問と社会の分業を主張する彼は、民俗学者が学者を名乗る以上、行政に直接関わる「特殊な当事者」になるのではなく、実際の業務をしかるべき機関や人員に任せ、自らは冷静に研究に専念すべきだと訴えている [施 2009b]。

2004年以降、中国民俗学は非遺保護運動に積極的に関わり、多くの民俗学者が動員されたが、すべての民俗学者がそれを望んでいたわけではない。一部の学者は、保護運動そのものを批判し、あるいはこれと関わらないことで学界を包む熱狂的雰囲気と一線を画そうとした。しかし現実問題として、大学や研究機関に所属している限り、この運動への参加を余儀なくされることもあった。それは親しい人の面子を立てるためであったり、職場での昇進や待遇改善のためであったり、純粋に生活レベルの向上のためであったり、あるいはそのいくつも重なる場合もあるだろう<sup>6)</sup>。例えば「聖人」と揶揄されるほど学問一筋で、政治協力のような活動とは無縁だと思われていた中国社会科学院の呂微も、恩師の劉錫誠からの誘いを断れず、「中国民間文化遺産緊急保護プロジェクト」の実行委員に就任している。また、非遺保護運動に迎合する民俗学者を最も辛辣に批判した施愛東でさえ、文化部委託の「民族伝統行事と国家法定休

日」プロジェクトで清明節の項目を担当している。もしもこのプロジェクトの代表者が恩師の劉魁立でなく、また自らの趣向に沿った研究に専念できるだけの待遇が保証されていれば、彼もまた参加しない道を選べただろう。

長年地道なフィールドワークを行ってきた当時北京師範大学の岳永逸も、多くの民俗学者が「御用論文」を量産する「非遺」の専門家や顧問へと転身していることに異議を唱える一人である。彼はもともと弱小学科だった中国民俗学が進んで時代の奔流に身を投じ、発展を企みながら運動の中へと飲み込まれてゆく現状を嘆き、次のように自問している。

民俗学は一体どうなるのか？

私は一体どうなってゆくのか？

そもそも私は今本当に学問に従事しているのだろうか？

私が従事しているのは果たして民俗学なのだろうか？

以上は「憂鬱な民俗学ノート」[岳 2013a, 2013b]からの引用である。「屈辱に耐えて担う非遺」というサブタイトルは、関連プロジェクトに参加せざるをえない自分への自虐という以上に、一部の民俗学者の本音を代弁していると言える。

なぜ「非遺」に関与する中国人民俗学者は「民俗学者」ではないとまで批判されるのだろうか。なぜ「非遺」に関わることで存在感と地位が向上した中国民俗学が本当に「民俗学」かどうか、疑問視されなければならないのだろうか。それが単に、保護行政の雑務に追われて本職の研究を疎かにしているというだけの理由なら、保護運動を民俗事象や民俗学の現在を取り巻く背景と捉えて、自ら納得がいく研究を行えば良いはずである。なぜ不本意ながらも関連プロジェクトに参加することが「屈辱」とまで表現されてしまうのだろうか。それは、批判者が考える「民俗学」や「民俗学者」のあるべき姿と、現在「非遺」という文脈の中で語られる民俗学あるいは民俗学者とが、相容れないからだと考えざるを得ない。彼らが守ろうと奮闘しているこの括弧付きの「民俗学」と「民俗学者」は、誕生以来中国民俗学が目指すひとつビジョンであり、志向する自我のアイデンティティである。

### 3. 中国民俗学が抱いた初志

中国民俗学の母胎が20世紀初頭の五・四新文化運動にあったことはよく知られている。しかし1918年2月に先鋒を切って北京大学歌謡征集所を設立し、その中核として歌謡採集運動を展開した劉半農によると、彼自身の興味はあくまで「文芸作品としての鑑賞」に集中していたという[陳 2005: 32]。さらに翌年五・四運動が巻き起こると、劉半農ともう一人の発起人で

ある沈尹黙は国外へ留学し、歌謡採集運動自体はそのまま中断を余儀なくされてしまった。

民俗学という視点が浮上するのは、1920年代のことである。1920年、沈兼士と周作人が北京大学歌謡研究会を設立し、当時国外にいた劉半農と沈尹黙の外に、胡適、常惠、錢玄同、魏建功、顧頡剛といった文学、言語学、歴史学の学者がこれに加わった。1922年『歌謡週刊』の創刊の言葉において、周作人は歌謡採集の目的を第一に「学問」、第二に「文芸」とし、さらに「歌謡は民俗学上の重要な資料である。我々はこれを記録し、専門的な研究に備える」[周 1922]と明記した。もともと歌謡採集運動の背景には、大衆の言葉に注目し、口語体の新しい文学によって文語体の伝統的な文学を打破しようという文学革命の思想があったのだから、「文芸」が運動の目的に挙げられるのも当然である。注意すべきなのは、むしろ「学問」という目的が「文芸」よりも優先された点である。そして儒教の經典研究を主流とする古い学問体制を打破し、諸外国の学科概念を取り入れようとする時代の波の中で、周作人が着目したのは他ならぬ民俗学だった<sup>7)</sup>。1923年9月、北京大学歌謡研究会の名義でロシア人教授に宛てた書簡の中では、歌謡の学術研究は「民俗学 (Folk-lore) の方法」を採用すべきだ、とより明確に主張もしている [周 1923]。このことから、北京大学歌謡研究会の設立あるいは『歌謡週刊』の創刊を、中国民俗学誕生の瞬間と見なす研究者は多い。しかし『歌謡週刊』に寄稿された文章の中に、周が期待する「民俗学 (Folk-lore) の方法」(当時は実質上歴史・地理学的方法を指す)を適用したものはほぼなかった。顧頡剛は1922年6月19日に劉経庵に宛てた書簡の中で、劉半農出国後の北京大学歌謡採集所を引き継いだはずの歌謡研究会が「数年来何の声も、匂いすら発さず、全く何もしていない」と批判している。顧は口先だけの「いわゆる新文化運動の大家」を嫌ったが、周作人についても「役職に就くだけ就いて、業務を行わない」と酷評している。結局、歌謡を「民俗学上の重要な資料」と捉えて真剣にこれを研究しようと志す者は、北京大学歌謡研究会から離れ、別に北京大学風俗調査会を設立することとなった。まもなく、北京大学歌謡研究会は五・三〇事件の勃発と『歌謡週刊』の『北京大学研究所国学門週刊』への統合をもって解散した。1935年に一度結成されたものの、劉錫誠によれば会議すらも開かれなかったという [2004b]。また会の性質も当初とは異なり、翌年復刊された『歌謡』の巻頭でも、胡適は歌謡の研究価値を認めながらも、自らが歌謡を収集・整理する最大の目的は中国の新しい文学に新天地を開くためだと述べている。

一方の風俗調査会は政治的な宣言をせず、研究の範囲を歌謡から民具、環境、習慣、思想にまで拡大し、調査表の作成や現地調査、民具の展示、「風俗学」の講義開設など、一連の学問活動を展開していた。「願望ばかりで実際の活動は少なかった」[劉 2004a]との見方もあるが、1925年4月から5月にかけて北京郊外の妙峰山で行われた調査は「現代中国民俗学史上初めて目的と計画性をもって組織的に行われた、特定の事象についてのフィールドワーク」[施 2010: 62]であり、その成果は決して過小評価されるべきではない。組織の名称を「民俗調査

会」とする常恵らの案こそ採用されなかったが<sup>8)</sup>、風俗調査会の設立は、学問としての中国民俗学誕生の瞬間とも見ることができる。つまり、中国民俗学は五・四新文化運動を母胎にしながらも、実際にはむしろ運動から距離を取ることで、純粋な「学問」を志して産声をあげたのである。

もちろん、北京大学風俗調査会の活動が、そのまま中国民俗学の土台を形成したというわけでもない。時代がそれを許さなかった。相次ぐ混乱に北京の情勢は厳しさを増し、「知識人の恐怖の時代」[周 1945] が到来したのである<sup>9)</sup>。研究に専念することができなくなった北京の研究者は、1926 年以降相次いで南下し、活動の拠点を広州へ移した。「明日をも知れぬ我が身」[顧 2007: 111] を案じるほどの状況におかれながらも<sup>10)</sup>、1927 年顧頡剛、容肇祖、鍾敬文らは中国史上初めて「民俗学」という名称を用いた研究組織、「中山大学民俗学会」を設立した。その機関誌『民間文芸』では、すでに神話や昔話、伝説、なぞなぞ、諺、大衆劇の台本など、後に民間文学と呼ばれる対象全般にまで視野が広がられていた。後に『民俗週刊』と改名してからは、研究範囲を民間の信仰や習慣、芸術全般に拡大され、停刊と復刊を経て 1933 年の廃刊まで合計 123 巻を世に送り出した。

雑誌以外にも、中山大学民俗学会は民俗学叢書も多数出版しており、例えば『民俗学小叢書』には『孟姜女故事研究』のような後に中国民俗学の古典となった作品、バーンの『民俗学概論』やレヴィ=ストロースの『野生の思考』など西洋民俗学人類学の名著の部分訳も収録されている。また人材の育成にも力をいれ、1928 年 4 月から約 2 カ月にわたって「民俗学伝習班」を開講した。その内容も何思敬「民俗学概論」や鍾敬文「歌謡概論」などの総論、顧頡剛「伝説の整理方法」や容肇祖「風習資料の収集方法」などの方法論、劉奇峰「ギリシャ神話」、馬太玄「中印昔話の比較」などの比較研究、汪敬熙『民俗学と心理学』、崔載陽『民俗心理』など他の学問を積極的に取り入れたものなど、非常に豊かであった[陳 1993]。そして西南の少数民族について初めて実地調査を行ったのも中山大学民俗学会だった。

「当時の条件がいかに厳しいものであっても、中山大学の民俗学チームは稀に見る団結と繁盛の雰囲気包まれていた」と施愛東[施 2009a] は述べているが、この点はさらに評価されてもよいだろう。不安定な情勢のもと、極度の人手不足、経費不足を凌ぎながら学会の事務を一手に引き受けていた鍾敬文は、1928 年 7 月辞職に追われたが、なおも『民俗週刊』の編集者の言葉として学問に対する志を語っている。

私たちの仕事は確かに幼稚なところもあり、議論の余地は十分にあるだろう。だが、つねに学問のため、真理のために努めていると自負している。少なくとも心は純粋なのである。無分別な人々に罵られようと、頭脳が明晰でない人々に敵視されようと、私たちは恐れない。私たちはただ寛容な学者に心静かに理解し、判断して欲しい。厳しい指摘も受けよう、

それが確かに真理のためであるならば。蔑まれることも恐れはしない, 学問の尊厳を守るためならば。公平な判断が下される日は必ずや来る。たとえそれが現在でないにしても [鍾 1928]。

鍾が辞職した翌年には顧頡剛が中山大学を去り, 求心力を失った他の創設メンバーも次々に広州の地を後にした。だがそれはある意味で中山大学民俗学会の取り組みを広州以外に広げた結果ともなり, 厦門や福州, 杭州, 漳州, 南京, 寧波などの地で相次いで関連組織が設立され, 『民俗週刊』を模倣した雑誌も刊行された。そして 1930 年代以降, 各地の民俗学会を併合して「中国民俗学会」を創設しようという意欲につながってゆくのである<sup>11)</sup>。

#### 4. 「学問」の難航と「学科」設立の努力

だが, 風俗調査会で撒かれ, 中山大学民俗学会で芽生えた種が, 中国民俗学という「学問」として形になったのはいつかといえば, それは 1980 年代以降のことである。その理由は中国が 1930 年代から約半世紀にわたって重なる暴動や事変, 戦争, そして革命に揺れたためだが, 決してそれだけが理由ではない。激動の時代を生きた中国人学者が志向する中国民俗学が, 「学問」から別の物へすり替わってしまったことも大きく関係している。

この点について, 後に「中国民俗学の父」とまで呼ばれた鍾敬文の経歴は, 中国民俗学の歩んだ道を物語っていると言えよう。

中山大学民俗学会の活動は, 政治と距離を置いて純粋な学問を追求しようとするものだった。広州から杭州へ移った鍾敬文は 1930 年に杭州民俗学会を立ち上げた後, 数多くの国内外の論著から学び, 「中国白鳥処女型故事」などの代表作を書き上げた。1934 年には昔話の比較研究を志して民俗学の理論知識を固めるべく, 日本へ 2 年間自費留学までしている。この杭州―日本時代は鍾敬文自ら「一生この分野で学問に従事することを決定づけ, 自身の学問の知識構造を充実させた」[鍾 1997a: 774] と述べるように, 「学問」に打ち込んだ時期であった。しかし 1936 年に帰国した直後日中戦争が勃発し, 彼は主に広東四戦区政治部で宣伝工作に従事し, 留学の成果を発揮することなく, 「鉄と火の戦争」の中で「新しい厳粛な任務」のために「民俗学やその類の業務は当然一時放り投げざるを得なかった」のである [鍾 1993: 897]。

日中戦争当時, 中国の土地は大きく日本軍によって占領される「占領区」, 蒋介石が率いる国民党が支配する「奥地」, 共産党が勢力を持つ「根拠地」に分かれていた。「占領区」では, 「華北農村慣行調査」のような日本主導による各種調査や, 制限付きの自由が許された輔仁大学東方博物館のエーデルのような外国人による研究が行われていた。多くの中国人学者や研究機構が集まる「奥地」の西南, 西北では, 辺境の生活の現実を理解するという政治的・社会的

な要請があり、人類学的な手法による少数民族研究が大きなテーマとなっていた。それに対して、延安を中心とした「抗日根拠地」では、毛沢東の「文芸講話」に代表されるように、文学や芸術分野で「人民大衆」の口承を重視する姿勢が強調され、五・四運動の歌謡収集に見られたような啓蒙主義的な運動を、大規模な政治運動として推し進めていた。当時鍾敬文が担った「新しい厳粛な任務」というのも、民衆の思想や文化を理解し、慣れ親しまれている言葉や思考の形を利用して宣伝・教育活動を行う一種のプロパガンダ工作であり、そこに自由で新しい「学問」への期待と情熱を謳えるほどの余裕はなかった。

こうした知識人たちの活動を組織化したものが1938年3月に武漢で誕生した「中華全国文芸界抗敵協会」であり、鍾敬文は曲江支部の常任理事に選出されている。1949年に中華人民共和国の建国が宣言された翌年には、初の民間文学の全国的組織「中国民間文芸研究会」（以下「民研」）が北京で設立されたが、鍾はその副理事長に就任し、その他の役職についたのもほとんどが「全国文芸界抗敵協会」の創設メンバーだった。「中国共産党主導のもと、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を指針とし、百花齊放及び百家争鳴の手法を貫き、数多くの民間文学関係者を団結し、積極的に我が国の各民族の民間文学を採集、整理し、普及させ、研究することで、我が国の社会主義科学文化事業の繁栄と発展のために奮闘する」という趣旨からも明らかのように、「民研」は学術団体というよりむしろ政治団体に近かった。

この流れを受け継いで、1951年鍾敬文は北京師範大学に中国初の民間文学教育研究室を設立し、『民間文芸集刊』の創刊や『民間文芸新論集』の出版、院生の育成など精力的に活動する。だが現在の基準から見れば、この時期に執筆された「歌謡における反米帝国主義思想」や「民間故事の中の階級闘争」などの文章に学術的な価値を認めることは難しい。この点については鍾自身も「時々自分でも執筆したものが文芸評論ではなく、政治思想評論だと思った。だが当時の政治的雰囲気の中で、私の心の中に反省の光は弱かった」[鍾1997b: 912]と回想している。大々的に採集活動が行われてもその成果が革命思想に満ちた『紅旗歌謡』としてまとめられたり、政府の幹部から農民まで全国民が政治思想と歌謡とを融合させた詩作に励む「新民歌運動」が展開されたりしていた時代においては、これはまた仕方のないことだったかもしれない。

また、この時代の鍾敬文の活動をまったく「学問」とは無縁な政治活動だとするのも誤りだろう。実際には、当時の鍾も「学問のため、真理のために努力」していたのであり、ただその方法論が現実から学び理論を構築するといういわゆる「实事求是」に限られ、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想以外に真理が存在しなかっただけの話である。「統治階級」に搾取される哀れな「労働人民」に同情を寄せ、「人民の口頭創作」に反映される悲惨な現実を告発し、支配者への抵抗や労働への情熱を賞賛する時、彼は「少なくとも心は純粹」だったのであり、またそれは「民衆の立場に立って民衆を理解しよう」という中山大学民俗学会の思想とは表面

的な矛盾は生じなかったのである。ただかつての「民衆」は「人民」へ、「民間文学」は「人民の口頭創作」へと読み換えられ、国をあげて絶対化されていった。この絶対化のおかげで、中国民俗学は動乱の時代を「民間文芸学」として生き残れたのだが、一方で口承文学以外の民間の思想や文化、慣習などの「伝統」は「創造」とは無縁の封建的残滓と見なされ、それらを対象とする民俗学という学問も否定されることになった。

1960年代に入ると、「工・農・兵」と対立するカテゴリにくられた知識人は追放され、古い思想、文化、民俗、習慣の撲滅運動が全国的に展開された。「大躍進」から「文化大革命」の間、高等教育機関は機能を停止し、書籍は燃やされた。鍾敬文を含む民俗学者の多くが職を追われ、徹底的な自己否定を強要され、封建的文化の象徴のような民俗事象も無残に破壊された。そして中国民俗学は長い空白の時代に入る。

もちろん空白とはいえ、鍾は大変な状況にありながらも「我が国の学問に対する誠の心に支えられ、利用できるあらゆる時間とその他の条件を利用して」清末の民間文学について史的考察を行っている〔鍾 1993: 901〕。「晩清革命派作家の民間文学の運用」や「晩清改良派学者の民間文学に関する見解」などの論文は、比較的静かな筆の運びで資料を整理しており、今以上に評価されるべき良作である。しかし、中国民俗学の組織的な動きは皆無だった。また学問が政治を啓発した結果、政治によって取り消されるという悲劇の中心にいた中国人民俗学者にとって振り返るに耐えないという意味でも、これは空白の時代なのである。

文化大革命の終結と改革開放の宣言は、しばしば政治運動に翻弄され続けた中国民俗学がようやく迎えた春に例えられる。しかし、この春に民俗学者がまず育てたのは「学問」ではなく、「学科」としての中国民俗学だったことに注目したい。

「命はすでに古稀を過ぎ、かけがえのない多くの時間は踏みにじられ、個人的な気力も日に日に弱っている。だが命の灯が残っている限り、民間文芸学と民俗学科の建設と推進という志は実現せねばならぬ」〔鍾 1993: 902〕。かつて「学問」を強く志向しながらも政治の波に飲み込まれ、体力的にも精神的にも恵まれた時期にほとんど研究らしい研究ができぬまま年老いてしまった「著名な民俗学者」の学科設立への決意は、ある意味悲壮だった。これまで何度も短い春を経験してきた彼らがまずやらなければならないことは、いつまで続くかも知れない春を謳歌して研究に没頭し、業績を残すことではなかった。むしろ個人的な研究を犠牲にしてでも、新しい教育制度に沿って「学科」という形で民俗学の生存権を確保し、次世代を担う若い人材に「学問」という初志をつなぐことだったと言えよう。

1978年秋、鍾敬文は「民俗学及び関連研究機関の建設に関する提議書」を作成し、顧頡剛、白寿彝、容肇祖、楊堃、楊成志及び羅致平らと連名で中国社会科学院に提出した。この数ヶ月後には烏丙安と劉航舵が「中国民俗学再建の新たな課題」を同学院に寄稿している。こうした民俗学再建への熱意は、まず民間文学の学科設立という形で実を結んだ。

1978年夏、教育部は文系大学の基本課程に民間文学を導入する決定を下し、その委託を受ける形で北京師範大学は民間文学の教師育成研修クラスを開設した。同年10月には北京師範大学で民間文学教育研究室が再建され、更に翌年2月には教育部が全国16の大学から民間文学関係の教員18名を北京師範大学に集め、組織的な人材教育と教材編纂を推進してゆく〔許1999:423-424〕。この教材作成には許鈺、張紫晨、烏丙安、張振犁、陳子艾、巫瑞書、屈育徳などが執筆に加わり、1980年に『民間文学概論』として出版された。80年代に入ると北京師範大学民間文学教育研究室は中国初の民間文学博士学位授与機関に認定され、また前記中央政府主導の「三つの集成」の編纂に尽力した結果、1988年には正式に国レベルの重点学科に認定された。

だが中国人民俗学者の学科設立へ向けた活動はここで終わらなかった。民間文芸学が新しい教育体制の中で学科として認められ、中央政府からプロジェクトを請け負うようになって、民俗学は事実上学科としての資格が取り消されたままだったのである。その理由には、民間文学が政治的に重視され続けた歴史があったことや、実際に民間文学関連の業績と人材がより豊富であったこと、実質的に民間文芸学と一体化している中国民俗学を別に設立することが難しかったことなどが挙げられる。またドーソンが指摘したように、共に「Folklore」の訳語であった民俗学と民間文学のうち、後者のみが中央政府に受け入れられたのは、「民間」という言葉に「民衆から来たもの」という意味があることや、迷信のように政策上排除すべき民俗事象が存在することなども関係しているだろう〔安1996〕。

70歳を過ぎた鍾敬文は中国民俗学の学科設立へ向けて、執筆や講演などを通じ、中国という国にいかにも豊かな民俗事象が存在し、それを研究する民俗学が中国にとってどれほど重要であるか、すでに重点学科となった民間文学とどのような深いつながりがあるのかを訴え続けた。もちろん学科創設に尽力したのは鍾敬文一人だけではない。例えば1981年5月「民協」の年会では「我が国社会主義の新たな民俗学の建設するために尽力しよう」というスローガンが提出され、また1981年8月の遼寧民俗学会を皮切りに、吉林省や浙江省などで地方的な民俗学会が相次いで設立された。1983年5月に中国民俗学会が設立されると、民俗学の学科建設に関する動きは組織化された運動として本格化してゆく。その典型的な例が全国民俗学伝習班の開講だろう。中国民俗学会創設2カ月後に始まった第1回全国民俗学伝習班では、鍾敬文、費孝通、楊成志、馬学良、白寿彝、羅致平、常任俠、容肇祖、劉魁立といった民俗学及びその隣接学科を代表する人物が講師となり、全国各地から集まった2百名近い聴講生を対象に、民俗学の基本的な概念や方法論、隣接学科との関係などについて集中講義を行った。民俗学伝習班の伝統は中山大学民俗学会に遡るが、中国民俗学会はそれとは比較にならない規模で、大学で民俗学を教えられる人材を育成していったのである。

民俗学の学科設立を目指す運動と並行して「三つの集成」のための採集運動が全国で展開さ

れると、中国民俗学内では資料と調査、研究をめぐる諸問題について組織的に議論する機運が高まった。風俗調査会の創設からすでに半世紀以上の時を経ていたとはいえ、中国人学者が実際に研究に専念できたのは10年にも満たなかった。民間文学を含む民俗事象にはどんなものが含まれるのか、それはどういう性質を有しているのか、どのように研究すべきなのかといった基本的な問題についても、まだ十分に議論されていなかったのである。1980年代に中国人民民俗学者は民俗事象の範囲や特徴、内容、形態、機能、研究法などについて、大量の論文を作成した。中国民俗学会が1985年から1990年にかけて主催した大型シンポジウムには毎回60本以上の論文が寄稿されたが<sup>12)</sup>、その大半はこうした問題を議論したものであった。

だがその一方で、80年代から活発化した学科設立運動及び採集運動は、多くの民俗学者が自らの興味に沿った研究に集中できる時間を奪っていった。個別研究が全くなかったわけではないが、そのほとんどは民間文学や民俗事象が反映する人民の社会生活や社会闘争の歴史、世界観を読み取ることに終始しており、その強いイデオロギー性のために、素材は異なっても結論はほぼ同じという奇妙な事態に陥っていた。加えて当時は結論が同じでも新しい素材さえ提示すれば「空白を埋めた」として評価される風潮も強かった。

中国民俗学が組織をあげて学科建設に取り組み、大規模な全国調査を通じて中央政府に存在感をアピールした1980年代は、中国民俗学が飛躍的に発展を遂げた時代と称されるが、しかし実際の研究レベルは大幅に向上したわけではなく、むしろ「学問」を犠牲にしながら、「学問」の基盤となる「学科」のために奔走した苦節の時代だと言った方が的確だろう。

## 5. 立ちはだかる学科の壁

1990年代に入る頃には、民俗学と親縁関係にあった社会学や文化人類学、民族学はすでに学科としての地位を固め、欧米や日本で博士号を取得して帰国した研究者に力強く牽引されて、研究水準が飛躍的に伸びていたが、民俗学はそれらの勢いに圧倒され、弱小の様態を呈していた。

「人民の文学」を扱うというだけで中央政府と社会から過剰に重要視された時代が過ぎたことで、頼みの綱であった民間文芸学の影響力を失い、また採集運動やイデオロギー性の強い研究に終始していた結果、隣接学科と対等に対話できるだけの研究成果が蓄積できなかったのが、主な原因だった。確かに民間文芸学は国の重点学科ではあったが、岳永逸が述べるように、「重点」には「政策の制定者がこれは重要だと認識し、前衛性と応用性が顕著である」と言う意味と、「援助の手を差し伸べ、支えなければならないほど弱小」という意味がある[岳2012]。民間文芸学はもはや後者の意味に近かったと言えよう。

中国民俗学の弱体化を招いたもう一つの原因は、民俗学者の努力も虚しく、民俗学という学

科の地位が未だ確立できていなかったことである。これはある意味、民間文芸学を表盾に学科地位を築いてきたことの、致命的な副作用でもあった。

中国では、国が承認した学問分野を上下3等級に分類される「学科」とし、國務院学位委員会がこれを学科目録として公布して大学の学科設置と運営を指導している。この学科制度が1983年に施行されて以来、「民間文芸学」は長い間「中国文学」という1級学科の下に置かれる2級学科であり、「民俗学」は「民間文芸学」の下に置かれる3級学科だった。3級学科にも一応学科という名目がついているものの、2級学科とは違い、学部生への講義や大学院生の育成、科研費用の申請、重点学科指定による研究費の支給、研究室の設立などが許可されず、教育・研究に必要な環境づくりができないという点で、それは単に研究方向を示す言葉以上の意味を持たない。さらに「中国文学」という大きな枠組みの下では、民俗学者の活動は制限され、調査費用も確保できず、科研申請の資格さえない。こうした3級学科としての地位は、民俗学発展の重い足かせとなった。

またその一方では、改革開放をもたらす経済の高度成長に伴い各地の農村で過疎化や都市化が進んでおり、生活様式や価値観は激変し、従来の民俗学の研究対象そのものが急速に消えていく現実があった。それに危機感を抱き、比較民俗学や都市民俗学に活路を見出そうとする研究者も現れてきたが、当時はまだ「提唱」や「試論」以上の成果は生み出せなかった。

1990年から始まった日本人民俗学者との「江南農村共同調査」に啓発された中国人民俗学者は、フィールドワークを通じて民俗学の存在感を示そうとも試みたが、理論意識の欠けた短期間の現地調査は一部の文化人類学者に「サンプル採集」と揶揄され、却って「民俗学＝資料学」というイメージを流布させる事態を招いた。どんなに民俗とそれを研究する民俗学の価値を叫ぼうと、立ちほだかる学科という壁と、近隣学科、とくにほぼ同時期に生まれた兄弟学科でもある人類学の前で、中国民俗学は大きく自信を喪失していたのである。

こうした状況に変化をもたらしたのは、若い世代の民俗学者、特に改革解放後の北京師範大学で鍾敬文に師事した博士課程生たちだった。鍾敬文は1981年にはすでに中国初となる民間文学博士課程の指導教官に認定されていたが、「私自身が博士になったこともないし、どんな基準で博士になるべきかも分からない」として、1985年まで学生を募集しなかったという[陳2002]。そもそも鐘の最大の興味は口承文芸にあり、先達や外国人学者に啓発されながら民俗学を経験的に学んだものの理論的素養は乏しく、加えて研究に専念する時間も限られていた。その業績もメッセージ性の強い文章が大半を占め、本格的な学術的論著は少なかった。当時すでに民俗学の権威と目された鍾敬文が、この点を自覚していたことは幸いだった。彼は生前育てた50名近い博士に対して自らの主義主張を押し付けることはなく、楊利慧のように彼の意見を受け入れない学生が出てきてもそれを許し、尊重した<sup>13)</sup>。そして知識を教える以上に、無欲かつ真摯に「学問」に向き合う学者としての品格を、身をもって学生に伝えた<sup>14)</sup>。そして鐘

敬文の元を巣立った学生たちが、中国民俗学に新風を吹かせる人材へと成長していくことになる。

その先駆けとなったのが、高丙中<sup>15)</sup>の博士学位論文「民俗文化と民俗生活」であろう。高がこの論文で議論したのは民俗学の対象と志向性の問題であり、テーマだけを見ると改革解放後繰り返された議論と大差がないように思われる。だがかつての民俗学者が着目したのは虐げられてきた労働階級であり、文化が歴史の名残や思想の断片といった客観的事実を反映しているという前提のもと、実際に採集した資料から労働階級が社会的実践を通じて発展させてきた歴史や思想を必然的かつ科学的に描くことで、新しい社会主義文化政策に貢献しようとする傾向が強かった。つまり苦難の歴史を生き抜いてきた中国人民俗学者を支配していた思想、例えばマルクスの階級理論や直線的な発達史観、レーニンの反映論、毛沢東の「大衆路線」や「实事求是」などの限界を超えられなかったのである。さらには民俗学と民間芸学の関係性をうまく処理できていないことが学科建設の妨げになっていることを感じつつも、「労働階級が集団で典型的に伝承し拡散する」という点以外に両者に統合性を持たせることができず、そもそも民俗学が人文科学なのか、社会科学なのかという問題にすら明確な答えを出せないでいた。

高丙中が試みたのはこうした過去の民俗学への決別だった。

まず彼は過去の民俗学が民俗事象とその様式を表現する人間を無視しており、事象と様式が息づく生活の動的プロセスをも分割してしまったと批判した上で、「民」と「俗」について再検討を行った。そして「民」を古人や原始人、文字社会における非識字者と半識字者からあらゆる普通の社会の一員へ、「俗」を古俗や珍しい風習から社会で受け継がれるすべての行動模式と類型化した行為へと再定義することで、中国民俗学を過去の断片のかき集めから解放し、生々しい現実の人間の生活を見つめ、自らを活性化させうる可能性を切り開いたのである。

更に、広範囲に及ぶ民俗研究に一つの完全な研究対象があることを理論的に把握できなければそもそも民俗学の独立した学科としての基礎が築けないと指摘し、民俗学の対象領域がフッサールの意味での「生活世界」であり、その操作可能な研究対象が普遍的模式を有する生活文化だとしている。その上で、鐘敬文ら先達が提示した「民俗文化」や「民俗模式」といった概念を理論的に補完する意味で、「民俗生活」という概念を新たに提示した。

高丙中が啓発され、大幅な紙幅を割いて論じたウィリアム・グラハム・サムナーは、政府主導の社会改革に反対し、共産主義と社会主義を敵視する自由主義者である。その点だけを考えても、高丙中がその先に見つめていた新しい中国民俗学は、マルクス世代には把握しきれなかったと思われる。彼の博士学位論文は審査委員から高い評価を得たが、どこまで理解されていたかを判断するのは難しい。事実、高論文が1994年に出版された際に序文を寄せた鐘敬文は、高の英語力と学際的なアプローチを高く評価しながら、論文の内容にそのものについて深く言及していない。一方、より若い世代の民俗学者たちは、テキストからコンテクストへ、事象

からイベントへ、類型から人間へ転換してゆき、かつてイデオロギーに捕らわれていた民俗学は現代意識をもつ「学問」へ向けて着実に歩みだしていった。

中国民俗学が二級学科に昇格されたのは、まさにその矢先の出来事だった。1997年6月、国务院学位委員会と国家教育委員会は新たに「博士・修士学位授与及び院生育成のための学科・専門リスト」を公布し、民俗学を法学に分類し、一級学科である「社会学」の下に「人類学」とともに二級学科として位置づけた。しかし悲願がかなったはずの中国民俗学は更なる混乱に包まれることになる。

まず、同リストには改革解放後の教育制度においてずっと二級学科だった民間文芸学、しかも1996年には21世紀に向けて国が重点的に支援する学科にも選ばれたばかりの「民間文芸学」がなかったのである。

当時を知る王泉根によると、北京師範大学文学部は国务院学位委員会の官僚を呼び、94歳の鐘敬文と雍正皇帝の子孫に当たる后功が民間文学の重要性を訴える場を設けたという。そこでようやく官僚も、民間文芸学が重点学科に指定されたのは単に鐘敬文という老将がいるためではなく、民間文芸学そのものに価値があるからだということを悟ったが、すでに手続きが完了した学科編成を見直すことは不可能で、結局、二級学科である「民俗学」を「民俗学（民間文芸学を含む）」と変更する折衷案に落ち着いた。だが100を超える二級学科と三級学科がひしめく社会学部では、括弧付きの民間文芸学を抱えた民俗学は重視されなかった〔王2007〕。

しかも社会学の下級学科層に位置づけられても、「中国文学」という一級学科のもとで発展してきた民俗学はその教員のほとんどが文学部に在籍していたため、教員の新規採用枠や昇格審査から新入生の分配や、会議室の確保などに至るまで、その待遇は悪化の一途をたどった。二級学科から実質上の三級学科に格下げされたことで、「民間文芸学」の名目で研究費を申請することも、院生を募集することもできなくなった。さらに、民俗学を専攻する学生も文学部に在籍しながら取得する学位は法学という事態に陥り、卒業後の進路にも支障をきたすようになった。

民俗学の混乱はさらに続く。これまで中国民俗学のメッカであった北京師範大学民間文化研究室の内部で、民俗学と民間文芸学の方向性を巡って意見の対立が起り、「民俗典籍文字研究センター」と「民俗学と文化人類学研究センター」に分裂したのである。両センターは長年蓄えてきた資料や、民俗学名目のプロジェクトや研究費、優秀な人材などの争奪戦を繰り広げた。そして2002年に鐘敬文が死去すると、北京師範大学の求心力は急速に弱まっていった。ちなみに鐘敬文の絶筆となったのは、国务院学位委員会へ宛てて入院先の日中友好病院でした。ためた民俗学の1級学科昇格と民間文芸学の2級学科昇格を懇願する嘆願書だった。

## 6. 青年たちの奮起, そして挫折

21世紀以降, 北京師範大学に代わって影響力を増したのは, 中国社会科学院である。

中国社会科学院は国務院直属の人文・社会科学研究の最高学術機関で, 院生に限って学位を授与することができる, 教育よりも研究に重きを置いた中国政府のシンクタンクである。ここには1953年設立の北京大学文学研究所民間文学組から発展してきた文学研究所民間文学室と, 1979年に設立された少数民族文学研究所(現民族文学研究所)があり, 鄭振鐸や何其芳, 賈芝, 馬学良, 劉魁立といった民間文芸学の重鎮がそれぞれの所長や室長を歴任するなど, もともと北京師範大学に勝るとも劣らぬ実力と歴史をもっている。

しかも中国社会科学院は教育部の管轄下になく, 教育部による学科制度の影響をあまり受けなかった<sup>16)</sup>。つまり学科編成により大学所属の民俗学者が混乱を極めていた中で, 比較的安定した立ち位置で, 研究を続けられたのである。そして, 研究機関という性格上, 研究者は基本的に週1回の出勤日以外は拘束されず, 大学教員のように毎年何本の論文を発表しなければならないといったノルマもない。唯一の問題は給料が安いことだが, それでも純粋に学問を志す若い研究者には大きな魅力があった。2000年以降, 米ハーバード大学やインディアナ大学などに留学経験を持つ巴莫曲布嫫や朝戈金, 尹虎彬, 安徳明, そして大気物理学や美学などから民俗学へ転向した劉宗迪や戸曉輝, 施愛東といったユニークな人材が続々と中国社会科学院へ集まってきた。

民族文学研究所の所長は劉魁立であり, 彼自身がロシア留学経験者だったこともあり, 外国帰りの若手研究者を積極的に採用し, 海外との交流を進め, 諸外国の理論を大胆に導入するスタイルを厭わなかった。この結果, 花開いたのがパリー・ロード理論を根幹に据えた少数民族の叙事詩研究であり, 中国民俗学のテキスト批判などを推し進めた。

一方の文学研究所民間文学室を率いる呂微は, 「知識青年」として北京から西安に移住し, 北京師範大学や鍾敬文とはほぼ無縁の環境で文学を学び, 哲学に没頭した経験を持つ人で, その後も出身校や専門を問わず幅広く人材を受け入れ, 若手研究者の自由な思想を導き, 育てた。戸曉輝や施愛東, 安徳明など中堅の若手研究者が学者として頭角を現したのは, 呂と頻繁に交流するようになってからだといっても過言ではない。前記高丙中の博士論文の意義を初めて正確に把握し, 評価したのも呂微であり<sup>17)</sup>, 中国民俗学に強く内省を促し, 哲学の観点から民俗学・民間文学に学問として存続しうる根拠を探し求める試みは, 「生活世界」という概念とともに中国民俗学に浸透していった。

中国社会科学院の台頭は, たとえ人類学の前で自信を喪失し, 学科編成に混乱しようとも「学問」を諦めない一部の中国人民俗学者, 特に若手研究者を大いに勇気づけた。その雰囲気をもっと高めたのが, 「民間文化青年フォーラム」の誕生である。

2001年12月、北京師範大学の蕭放、北京大学の陳泳超、中国社会科学院の施愛東、朱鋼及び台湾輔仁大学の鍾宗憲らが、中山大学で行われた国際シンポジウムに集まった。彼らは年々定式化され、顔ぶれさえ変わらない無意味なシンポジウムが多数開催され、個人的見解に乏しく引用や焼き直しばかりの論文が専門誌に氾濫する現状を嘆き、民俗文化に関心を抱く人々が、その年齢や職歴に関わらず、たとえ稚拙でも新しい問題を議論し合える自由で平等な場が必要だという共通の認識を持っていた。

2002年7月、中国民俗学会第五回年会の場を借りて「民間文化青年フォーラム」の誕生が宣言され、9月に同名の学术交流サイトが開設された。同サイトは誰でも参加可能なネット掲示板であり、大学教員から院生、学部生、民俗愛好家まで大勢の利用者で賑わった。2003年7月からは掲示板と連動したシンポジウムも開催されたが、事後に論文集を出版するだけでなく、シンポジウム前から提出論文を公開して活発な議論を促したり、シンポジウムの進展がリアルタイムで更新されたり、学生の優秀論文を選出し表彰したりと、画期的な試みもなされた。

同フォーラムで議論された内容には、「フィールドとの決別」や「テキストへの回帰」、「パラダイムシフト」といった、民俗学の主流的な思想に挑戦するような刺激的なものが目立った。また、上の世代の民俗学者から「抽象的な空論」として切り捨てられがちな「内省」や「主体間性」、「対話」といった概念についても、中堅民俗学者から無名の若手研究者、学生などが同じテーブルにつき、より噛み砕いた表現で根気強く議論された。かつてマルクス主義という視野の中で「労働人民」や「風習」、「口頭創作」を議論していた時代には決して見えなかった「生活世界」という地平が、中国民俗学の目の前に切り開かれていったのである。

民間文化青年フォーラムは、2013年3月に活動を停止するまで約10年間続いた。活動停止の理由には、民俗文化に興味を抱く全ての人に開かれたフォーラムが、「自由で活気あふれる学术交流の場」から次第に「似非研究者の馴れ合いの場」や「学生の情報交換の場」へと変質してしまったこと、実際に創設や運営に関わり、学問を強く志向していた会員たちがこの傾向を容認できなかったこと、若い会員の多くが新設された中国民俗学会の公式掲示板へ移動し、創設メンバーの初志を受け継ぐ人材が見つからなかったこと<sup>18)</sup>などが挙げられる。

フォーラムを閉鎖に追い込んだ「似非研究者」というのは、主に改革開放前から民間文学に関心を抱き、長年採集や創作に取り組んできた「地方精鋭」と呼ばれる人々のことである。その中には「三つの集成」や民俗誌を編纂するために中国民俗学が育成し、実際に動員した地方の協力者も含まれる。確かに彼らは中国民俗学という社会性の強い団体にとって、かけがえのない基盤である。しかしこうした人々を、単純に担い手と研究者の中間ファクターとして位置づけるのは難しい。それは彼らの中には、恣意的に担い手を想像することで現実の担い手とすり替わったり、研究者のふりをして担い手に影響を及ぼしたり、他人の研究を剽窃した盗作を自費出版したりと、学術倫理に欠けた行為を繰り返す人が絶えないからである。フォーラムを

「学問の園」として守ろうとする民俗学者の期待とは裏腹に、こうした人々は続々とこのフォーラムに集い、フォーラムが推奨する学問の自由と民主性、そしてネット掲示板特有の公開性を逆手に取り、一定の影響をもつ「専門家」にさえなり、活発に発言をするようになった。その背景の一つとなったのが、本稿の冒頭でも述べた無形文化遺産ブームの到来である。

面白いことに、中国民俗学が非遺保護運動において影響力を増した時期と、フォーラムが勢いを失い始めた時期はほぼ一致している。もちろん表面上、フォーラムは相変わらず賑わっていたが、掲示板の発言者は学生や似非研究者が大半を占め、創設当時の会員はほぼ姿を消していた。シンポジウムを見ても、2009年には「非遺と民間信仰」のようにタブー的な話題を議論しようとして、民間文化青年フォーラムらしさを垣間見せているが、翌年には「民間文化と非遺保護」というありふれたものになっている。そこで2013年の第10回シンポジウムでは、「若手や学生が活躍できる場」から「専門的なテーマについて議論する純粋な学会会議」と敷居をあげることで、似非研究者を一気に振るい落とすと同時に、会員なら誰でも発表できる中国民俗学の年会との差別化が図られたが、失われた勢いを取り戻すことはできず、これを最後に活動停止を宣言したのである<sup>19)</sup>。

同時期に、北京師範大学にかわって中国民俗学を「学問」へ向けて大きく牽引した中国社会科学院も、また非遺保護運動の潮流から逃れられなかった。民族文学研究所所長の劉魁立が、国家非遺保護業務専門家委員会や中国民間文化遺産緊急保護プロジェクトで役職を担う、いわば非遺保護運動の中心人物の一人になったため、同研究所の巴莫曲布嫫や朝戈金らも保護行政の業務に追われるようになり、彼らが進めていた叙事詩研究やテキスト批判は頓挫を余儀なくされた。一方、文学研究所民間文学室では、一時、年中行事に関する科研への参加を強いられただものの、室長の呂微が運動に消極的だったこともあり、それ以上目立った関与はなかった。呂微と戸曉輝は運動から完全に身を引き、施愛東と安德明は運動を厳しく批判するようになる。

非遺保護運動が学問を志向する中国民俗学に与えた打撃は相当なものだった。特に高丙中の博士論文から生まれた「生活世界」に関する議論と、最終的に「生活世界」の議論へとつながるはずの理論研究が停滞し、この問題への関心の希薄化さえ招いたことは、中国民俗学という学問に大きな遺憾となって残るだろう。そんな不吉な未来を予兆させるのが、戸曉輝が2010年に出版した『愛と自由の生活世界への回帰 —— 純粹民間文学のキーワードに関する哲学的解釈 ——』に対する、中国人民俗学者の反応である。

戸の著作は民俗学者が使用する「民」、「モチーフ」、<sup>ファンクション</sup>「機能」、「神話」などの概念について現象学的還元を試みたもので、最終的に心理的意識と相対するところの純粹意識によって、民間文学に「愛と自由」という意味を付与し、純粹意識に意味を付与されることによって構成される生活世界を捉えようとした、5年がかりの大作である。だが、中国人民俗学者の生活世界に関する研究の最高水準を示したこの著書に対して、中国民俗学の反応は冷ややかだった。

もちろん好意的に評価したり引用したりする論著が皆無だったわけではないが、毎年大量に作成される民俗学関連の論著の中でそれはごく僅かであり、かつて中国民俗学を内省思想が大きく包み込み、民間文化青年フォーラムなどで盛んに議論されていた時代とは比較にならないほど冷淡だった。2013年に「生活世界」に関する議論を進めてきた中心人物である呂微が退職し、第一線から身を引いてしまうと、この傾向に更に拍車がかかることになった。

## 7. 「学問」と「学科」の狭間で

しかし、学問という初志を犠牲にしかねないリスクを背負ってまで、あるいは決して容易ではない道のりを経てようやく育ち始めた学問の芽を摘みかねないリスクを背負ってまで、中国民俗学が非遺保護運動に熱中するのはなぜなのか。あくまで無形文化遺産に含まれる民間文化が消え去ってしまうことを防ぎ、運動の中でなおざりにされがちな民衆のために声をあげる使命感ゆえの行為なのだろうか。それともよく批判されるように、個人的な名誉や影響力、多額の研究費などを手に入れるためだろうか。非遺保護が社会全体を巻き込む運動となっている以上、そこに様々な思惑が交錯するのは、むしろ自然なことだろう。ここで重要なのは、学術共同体としての中国民俗学の総意はどこにあるのか、という点である。

一つの答えが、2006年中国民俗学会第6回年会のシンポジウム「新しい時代の中国民俗学——そのチャンスと挑戦——」というテーマに現れている。つまり多くの民俗学者は、非遺保護運動を、中国民俗学が時代の波に乗って大きく発展を遂げるチャンスだと考えているのである。もちろん民俗学の発展とは、単に中央政府に重視され、社会世論に支持されるという意味ではない。本稿でも述べてきたように、中国民俗学はかつて民俗文化を利用可能な知識として発掘し、これをイデオロギーに見合った形へ改造する国策に加担することで発展してきた歴史をすでに経験している。しかしその結果、「伝統的な民俗文化＝歴史の遺留物」という認識が定着し、民俗学が研究すべき対象自体が排除されるという事態を招いた。また民俗学自身もイデオロギーの変化により国の寵愛を失い、2級学科と3級学科の間で翻弄され、学問の蓄積においても隣接諸学科に大きく遅れをとってしまった。

中国民俗学が非遺保護運動に見出しているチャンスとは、民俗文化を民衆の日常生活の中に再び蘇らせ、政府からもその存在価値が認められる「公共文化」としての地位を新たに築くことにあるだろう。さらに言えば、過去の過ちから学んだ中国民俗学がイデオロギーに完全に迎合するのではなく、むしろ国の文化政策を牽引し、むしろ国の文化政策を牽引し、民衆の多様な文化を国が認めると同時に国が認める文化を民衆が受け入れるという現代民族国家の建設に貢献することで、民俗学の価値をアピールし、独立した学科としての地位を獲得することにある〔高2008〕。

民俗学の学科建設は中国民俗学の悲願である。「民俗学」が2級学科に昇格した代わりに「民間文芸学」が事実3級学科に格下げされ、しかも社会学部と文学部の間で分断されている今、民俗学が独立した学科の地位を築くためには、もはや「民俗学」が一級学科に昇格し、「民間文芸学」がその2級学科になるほかない。2013年6月、中国民俗学会創設30周年を記念するシンポジウムでも、國務院学位委員会に向けて、民俗学の1級学科昇格が改めて提言された。もし非遺保護という中国全土が熱狂する一大運動に乗り遅れ、学科建設の好機を逃してしまえば、現在の教育体制の中ではもうあとがない。これは民俗学者、特に大学に在籍する者が共有する思いかもしれない。少なくとも、純粋な学問だけに没頭し、高い水準の研究成果を挙げるだけでは中国民俗学の存続が危ういという危機感は、教育部の学科編成による影響を受けなかった社会科学の民俗学者よりもずっと根強く、そして切実だろう。

現在の教育体制の中では、若い人材を育成するにも、多くの人材が集結する研究室を設立するにも、また研究費を申請するにも、独立した学科としての地位が必要となる。この現状を踏まえれば、非遺保護運動を通じて民俗学の学科建設を目指す動きと、純粋な学問としての民俗学を志向する動きは、根本的に矛盾するわけではない。中国という国では民俗学の「学問」という初志を実現するには、「学科」としての地位が不可欠なのである。

しかし、本来同じ方向にあるべき「学科」と「学問」という中国民俗学の二つのビジョンは、実際には互いに反発し合う自己像として存在している。一部の民俗学者は政治に積極的に関わり、非遺保護運動を追い風に「学科」としての中国民俗学を目指しており、また一部の民俗学者は「生活世界」に関する議論の進展と共に「学問」としての中国民俗学を夢見ている。両者は共有する大きなビジョンの下で統合されるのではなく、一方の実現がもう一方の実現を妨げかねない、あるいはすでに妨げているという問題に直面している。

現在、「学科」を目指す者と「学問」を目指す者の間では、非遺保護運動に参加すべきか否かという点をめぐって意見が激しく対立している。参与に積極的な人々は、自身の活動が明白な社会的意義をもち、民俗学の存続のためにも現実を見据えた戦略的な思考は不可欠だと主張し、運動に非協力的な民俗学者を現実には疎くて視野が狭い、あるいは空論の中に自ら萎縮していると非難している〔陳2013〕。それに対して過度の参与を問題視する人々は、民俗学者の本来は学術研究であり、保護業務は非研究要員に任せて分業化すべきだと訴え、一時のブームに過ぎない保護運動のために学術研究を犠牲にすれば、その傷は学問の致命傷になるに違いないと警告している〔施2009b〕。「学科」としての中国民俗学は「現実的戦略」かそれとも「権力への迎合」なのか、「学問」としての中国民俗学は「純粋な学問」かそれとも「非現実的な空論」なのか。「学科」という現実と「学問」という理想の両極で互いに位置付け合い、せめぎ合う民俗学者たちの姿は、一見一つの中国民俗学が内部分裂しているように見える。だがこの現状が照らし出すのはその百年近い中国民俗学の歴史そのものである。「学科」としての中国

民俗学と「学問」としての中国民俗学は、現在その存続をかけて1つの中国民俗学を奪い合っているのである。

本稿の第一部で引用した文章の中で、岳永逸が「民俗学は一体どうなるのか？ 私は一体どうなるのか」という問いを発しているように、中国民俗学は再び岐路に立たされていると言える。もし「学科」と「学問」という中国民俗学の2つの自己像が、本来あるべき姿で重なるとしたら、それは恐らく「民俗学」と「民間文芸学」が共に学科としての地位を築き、民俗学者が研究に専念できる環境が整った時であろう。あるいは民俗学者の「生活世界」に関する議論が再熟し、研究として花開き、その価値が周囲に認められた時だろう。もちろん、一方の民俗学が実現すれば、もう一方の民俗学も実現するという保証はどこにもない。更には両者が1つの民俗学を奪い合った結果、共倒れになる可能性も十分にある。水面下で激しく動く中国民俗学の動向を、今後さらに注意深く見つめて行く必要があるだろう。

注

- 1) 1990年代、中国の伝統工芸は生産が落ち込み、関連企業の倒産や人材の流失、後継者不足などにより伝承の途絶が危惧されていた。北京市の統計では、当時60種類の伝統工芸品目の内、約半数がすでに伝承されぬまま消失したとされている。康保成によると、問題の原因が工芸品に課せられる高い税金にあると考えた人々が国の軽工業部にかけあい、それを受けて『伝統工芸美術保護条例』の草案が作成され、可決後、1997年5月に正式に公布された。また、1993年には『中医薬品種保護条例』も公布されており、後に非遺保護運動において漢方を保護対象とする動きにつながるが、当時としては生産企業の権利を保護するのが主とした目的であった[康2012]。
- 2) 中山大学非遺研究センターがまだ民俗研究センターと呼ばれていた当時、研究費はほとんどなく、研究室も一室のみだったが、国の重点研究拠点に認定された途端、毎年教育部や中山大学、広東省から合計80万元の研究費が支給され、さらに別に拠点形成助成金として3年間で計450万元が支給されることになった。他にも機関誌『文化遺産』の出版補助金が60万元、広東省無形文化遺産の申請・宣伝などの業務委託費などの収入が約百万元あるという[王2009]。
- 3) 2004年から2007年にかけて、中国民俗学会は中央精神文明建設指導弁公室や文化部、国家発展改革委員会の委託を受ける形で「中国の行事と休暇に関する体系的研究」に取り組み、『民族伝統行事と国家法定休日』という報告書をまとめた。その間に「伝統行事と法定休日」、「中華民族の新年祝典と習俗」、「行事と社会生活の公共性」など一連の国際シンポジウムも主催した。その結果として2005年6月に中央宣伝部、中央精神文明建設指導弁公室、文化部、民政部及び教育部は共同で「伝統行事の活用による民族文化の優れた伝統の推進に関する意見」を発表し、さらに2007年に『『全国年中行事及び記念日休暇法』の修正に関する国務院の決定』が発表される運びとなった。中国政府が五・四新文化運動以降初めて公式に伝統行事をプラス評価に捉えたのには、民俗学の働きかけが大きかったと言えよう。
- 4) 地方レベルではいくつかの関連法律が作られていた。省レベルでは2000年5月の雲南省を皮切りに、貴州省や福建省、広西壮族自治区などで相次いで『民族民間（伝統）文化保護条例』が

学問としての民俗学, 学科としての民俗学 (王・西村)

公布され、2006年以降寧夏回族自治区や江蘇省、浙江省、新疆ウイグル族自治区などでも『非物質文化保護条例』が公布された。

- 5) 「民協」会長の馮驥才を始め、非遺保護運動を牽引していた上の世代の民俗学者は年齢と外国語能力などが問題視され、選考に落ちたが、ここから中国が専門家を推薦する際、事業そのものへの貢献度以上に、国際的な場で国の文化政策を発信、アピールする力を重視していることが窺える。
- 6) 中国の大学では教員の昇進などには、代表者として省市レベル以上の競合的資金を獲得し、当該プロジェクトを完成させることが必須条件である。等級の差には、給料だけでなく、住居の面積から出張時の待遇や出張回数に至るまで、様々な格差が付随している。
- 7) 周作人が1906年に日本へ留学し、留学中に柳田国男の著作に感銘を受けたことは有名である。帰国後の1913年には『兎歌之研究』という一文の中ですでに「民俗学」という言葉を用いている。
- 8) 常恵の呼びかけによって1923年5月14日に業務会議が開かれ、創設メンバーの間で組織の名称について議論が交わされた。常は歌謡が民俗学の重要な資料であり、さらに調査、研究の範囲を風習や儀式、迷信など民間文化の幅広い領域にまで広げ、中国民俗学の誕生を促すべきだという理由から「民俗調査会」を提案した。対して、会長の張競生は外来語である「民俗学」よりも中国に古くからある「風俗」という言葉の方が社会的に受け入れられやすいと主張し、最終的にその意見が採用された。
- 9) 五・四運動において自由と民主を謳った学生運動は、北京政府に揺さぶりをかけようとする政治勢力に煽られ続け、五・四運動自体が下火になった後も沈静化しなかった。風俗調査会が妙峰山実地調査で成果をあげた同月末、上海で五・三〇事件が起きると、北京でも相次いで学生主体の救国運動が展開され、連日の会議やデモにより講義を行うことも容易ではなかった。周作人をはじめとする教員たちも次々に激しい論説を発表するようになり、堅実な「学問」を強く志向していた顧頡剛も『京報副刊・救国特刊』での執筆に追われ、研究に専念することは難しかった。1926年3月18日、北京政府がデモ中の学生に向け発砲し四七名を射殺した「三・一八」事件が起きた。それまで政府が学生と教授を嫌おうとも簡単には手が出せなかったが、この事件によって状況は一変した。
- 10) 国民党の本拠地だった広州も決して安全だとは言いがたかった。当時国民党と共産党は第1次国共合作の関係にあったものの、中山艦事件に代表されるような軋轢が絶えず、顧頡剛もその日記の中で共産党員の奇襲攻撃に火の手が上がり、銃声が鳴り響く夜もあったと記している。また絶え間なく逮捕のニュースや訃報が全国から伝わり、その中には顧の教え子や同僚、共に「学問」を志していた劉策奇のような仲間も含まれていた。ちなみに劉策奇は広西省象県〔現象州県〕の小学校教員で、余暇を利用して現地の歌謡や風習を熱心に記録し歌謡研究会に送り、1923年9月から1925年4月まで発表した歌謡は80首を超え、顧頡剛を始め多くの関係者からひと目置かれる通信会員だった。
- 11) 広州から杭州へ移った鍾敬文は、銭南揚、江紹原や婁子匡らと共に民俗学関連の活動を精力的に行っていたが、その出版物は「杭州民俗学会」や「民間文芸研究会」、「民俗週刊社」などの名義で刊行されており、統一されていない。『民国日報』の副刊として発行した『民俗週刊』の第8号から「民俗学会編」とし、休刊にあたる第60号では「私たちはより大規模な中国民俗学会を設立したいと強く願っている。南京、汕頭、福州、厦門、漳州、徽州、寧波、杭州の民俗団体が一致団結し…(中略)…『中国民俗学会』を名乗る」計画を告げている。1932年8月に刊行さ

れた『民俗学集鏤』の第2輯には「中国民俗学会発行」と明記されており、さらに婁子匡によると、翌年には杭州、寧波、厦門、福州、漳州、汕頭、湖州、紹興、平湖などの地に中国民俗学会の支部が設立されたという〔施ほか 2013〕。慣例上、現在ではこの民俗学会は「杭州中国民俗学会」と呼ばれている。

- 12) この間に中国民俗学会が主催した主なシンポジウムには、中国民俗学会第1回学術討論会（1985年11月）や全国中青年民俗学工作者学術討論会（1987年3月）、第2回全国代表大会兼学術討論会（1988年10月）、第四回学術討論会（1989年10月）などがある。中国民俗学会秘書処がまとめた資料〔施ほか 2013〕によると、寄せられた論文の数は第2回全国代表大会兼学術討論会が最多の約百本、最も少ない全国中青年民俗学工作者学術討論会でも63本にも及んでいる。
- 13) 1992年指導教官の張紫晨が死去したため、楊利慧の指導は鍾敬文があたることになった。まだ研究テーマが決まらない楊に、鍾は女媧神話の研究を勧めた。鍾自身、神話に散見される女媧関連の情報を整理し、この女神が生まれた古代の社会的・文化的背景を描くつもりで、資料をある程度集めていたからである。しかし楊は鍾の文化史的な構想を採用せず、むしろ女媧神話を古代という枠組みから解放し、現代に生きる神話と信仰を描いた。
- 14) 鍾敬文死後、弟子たちは師の思い出を数多く記しているが、そのほとんどが鍾の学問に対する厳しく、慎重な態度に言及している。例えば「鍾先生は学生が学業に専念することを望み、夏休みや冬休みでもないのに家へ帰ることを良しとしませんでした。（中略）先生にとって、学問とは出家と同義語だったのかもしれませんが」〔蕭 2009〕。
- 15) 高丙中が中国社会科学院から北京師範大学の博士課程に入った時、指導教官だった張紫晨が10名ほどの院生を抱え多忙を極めていたことから、鍾敬文を頻繁に訪ね、意見を交わしていた。
- 16) 中国社会科学院文学研究所民間文学室は、1980年代に修士学位授与機関に認定されており、「民間文芸学」が「社会学」の3級学科に格下げされた後も、古代文学の中の研究方向という名目で民間文学の院生を育成し続けた。2005年に国务院が2級学科設立について大学の自主権を認める方針を出した三年後、民間文学室は正式に「中国民間文学」の修士課程を設け、2010年には更に博士課程も開設した。
- 17) 呂微はシンポジウムや非公式の場で高丙中の博士論文に度々言及しており、2010年には長文の書評も発表している。呂は、民俗学者がその研究対象から見出すのは、民俗学という学科の問題意識によって照らし出された人間そのものの存在価値であり、「人間そのものの存在価値を照らし出すこと」にこそ民俗学という学科の存在意義があると考えた。つまり、たとえ民俗学の完全な民俗学の研究対象を確定し、それにより民俗学を救えたとしても、民俗及びそれを研究対象とする民俗学が人間そのものの存在と全く無関係であるならば無意味なのであって、民俗学が人間そのものの存在にとって有意義で価値ある学問であるからこそ、救い、擁護するに値するのである。呂が高丙中の博士論文を高く評価したのは、決して高が民俗学の研究対象を再定義し、民俗学を守ろうと立ち上がったからだけではなく、高の眼差しが一貫して民俗学と人間そのものの存在価値及び存在意義の間の相関性に注がれているからである。つまり、高は人間の存在価値と存在意義を守るという民俗学の根本的な課題に突き動かされながら、その課題が照らし出す学科の正当性と学問の合理性を擁護するために、民俗学という学科の概念と概念化された論理を導入することで、最終的に人間そのものの主体的な存在意義と価値を示した、というのが呂の見解である〔呂 2010〕。
- 18) 2008年の統計開始以降、中国民俗学会の公式掲示板である「民俗学論壇」(<http://www.chinesefolklore.org.cn/forum/>)の総アクセス数はすでに5900万回を超えている。登録ユーザー数は

1万人を超え、同時オンラインユーザーの最高人数が2412名であった(データは2014.8.19現在)。

- 19) その後続として、2013年7月から「民間文化青年フォーラム」(第二季)が発足したが、かつてフォーラムで活躍していた1970年代生まれを中心とした学者たちがお金を出し合って、若手研究者の研究を奨励し、議論の場を提供するものとなっている。

## 文 献

- 安德明 1996 「多爾遜対現代中国民俗学史的論述」『北京師範大学学报〔社科版〕』第6期
- 安德明 2008 「非物質文化遺産保護：民俗学的両難選択」『河南社会科学』第1期
- 王晓葵 2009 「人類学化と「非物質文化遺産保護」」『日本民俗学』259
- 王泉根 2007 「学科級別対当今中国学術的双重影響」『粵海風』第6期
- 岳永逸 2012 「小学科の大窘境 憂鬱的民俗学札記之一」『新産経』第4期
- 岳永逸 2013a 「忍辱負重的「非遺」〔上〕憂鬱的民俗学札記之十四」『新産経』第5期
- 岳永逸 2013b 「忍辱負重的「非遺」〔下〕憂鬱的民俗学札記之十五」『新産経』第6期
- 許鈺 1999 「北師大民間文学教研室的昨天與今天」『口承故事論』北京師範大学出版社
- 高丙中 1994 『民俗文化與民族生活』中国社会科学院出版社
- 高丙中 2005 「中国民俗学会二〇〇四年工作總結」中国民俗学会  
<http://www.chinafolklore.org/web/index.php?NewsID=二二四一> (2014.8.16 閲覧)
- 高丙中 2008 「作為公共文化的非物質文化遺産」『文芸研究』第2期
- 康保成 2012 「『中国人民共和国非物質文化遺産法』形成的法律法規基礎」『民族芸術』第1期
- 顧頴剛 2007 『顧頴剛日記』第2卷, 台湾聯經出版公司
- 戸曉輝 2010 『返回愛與自由的生活世界：純粹民間文学關鍵詞的哲學闡釋』江蘇人民出版社
- 周作人 1923 「發刊詞」『歌謡週刊』第1号
- 周作人 1923 「歌謡研究会復伊鳳閣信」『歌謡週刊』第26号
- 周作人 1945 「紅樓内外」刘桃編著『紅樓内外』中国世界語言出版社(2003)所収
- 鍾敬文 1928 「編者余言」『民俗週刊』第24期
- 鍾敬文 1993 「七十年學術經歷紀程——鍾敬文学術論著自選集」『鍾敬文文集』安徽教育出版社(2002)所収
- 鍾敬文 1997a 「我與中国現代民間文芸学——『民間文芸学及其历史』自序」『鍾敬文文集』安徽教育出版社(2002)所収
- 鍾敬文 1997b 「我在學術上的幾点反思與体会」『鍾敬文文集』安徽教育出版社(2002)所収
- 鍾宗憲 2005 「『民間文化青年論壇』的緣起與現況」『民間文學研究通訊』第1期
- 蕭放 2009 「蕭放憶鍾敬文『中国民俗学之父』最後的夢」『新京報』(10月21日付)
- 施愛東 2006 「從「保衛端午」到「保衛春節」：追蹤與戲說」『民族藝術』第2期
- 施愛東 2009a 「中山大学民俗出版與中国現代民俗学的建立」『中山大学学报〔社科版〕』第1期
- 施愛東 2009b 「學術運動對於常規科学的負面影响——兼談民俗学家在非遺保護運動中的學術担当」『河南社会科学』第3期
- 施愛東 2010 『中国現代民俗学檢討』社会科学文献出版社
- 施愛東ほか 2013 『中国民俗学会大事記』中国民俗学会秘書処編印

- 陳泳超 2005 『中国民間文学研究的現代軌轍』 北京大学出版社
- 陳勤建 2013 「民俗学者與当今中国非物質文化遺產保護」 日本民俗学会第 65 回年会提出論文
- 陳啓新 1993 「『中大民俗学会』 在中国民俗学發展中的歷史作用」 『中山大學學報〔社科版〕』 第 4 期
- 陳福康 2002 「難忘師恩」 『中華讀書報』 第 1 期
- 劉錫誠 2004a 「中国民間文艺学史上的民俗学派」 『湖北民族學院學報』 第 1 期
- 劉錫誠 2004b 「北大歌謠研究会與启蒙運動」 『民間文化論壇』 第 3 期
- 容肇祖 1928 「北京大学歌謠研究会風俗調查会的經過」 『民俗週刊』 第 17·18 期
- 姜子匡 1933 「中国民俗学運動的昨夜和今晨」 『民間月刊』 第 2 卷第 5 期
- 呂微 2010 「民俗学的笛卡爾沈思 —— 高丙中『民俗文化與民俗生活』 申論」 『民俗研究』 第 1 期

## 要 旨

21世紀の中国民俗学を読み解く糸口となるキーワードが二つある。一つは日本語の無形遺産あるいは無形文化遺産にあたる「非物質文化遺産」で、もちろんこれはユネスコの牽引の下で展開されているグローバルな運動と密接に関わっている。もう一つはフッサールの後期思想を代表する「生活世界」で、近年新しい民俗学へと打開する中で注目されている。両者は単に中国民俗学者の間でホットなトピックというわけではない。「非遺」運動を好機としてそこに身を投じる形で民俗学の学科としての地位を固めておくのか、それともそれと一線を画して「生活世界」などの概念をかりて民俗への認識を刷新して民俗学の学問としての価値を追い求めていくのか、そこに誕生以来政治と学問の狭間で揺れ続ける中国民俗学が、自らの存続をかけて歩む二つの異なる道筋が見え隠れ、「学科」と「学問」という中国民俗学の二重の自己像が映し出されていると言えよう。

キーワード：中国民俗学, 「非遺」, 「生活世界」, 学科建設

## Abstract

This article introduces two keywords to understand modern folkloristics in China. One is the “Intangible Cultural Heritage” designated by UNESCO at the turn of the 21<sup>st</sup> century, which prompt the nirvana of folkloristics in China. The other is “life-world” or “Lebenswelt” coined by Edmund Husserl, especially in his later philosophical works.

The author gravitates towards these two keywords for their prevalence in Chinese folkloristic scholarships in the last decades, as well as their significance in representing two divergent paths of Chinese folkloristics in its attempt to survive as a discipline in given political and cultural context. The entanglement and intersectionality between pure science and movement ran throughout the last century in the revolution of Chinese folkloristics.

**Keywords:** Chinese folkloristics, “Intangible Cultural Heritage”, “Lebenswelt”, discipline construction